

「我が人生思い残すことなし」(後編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

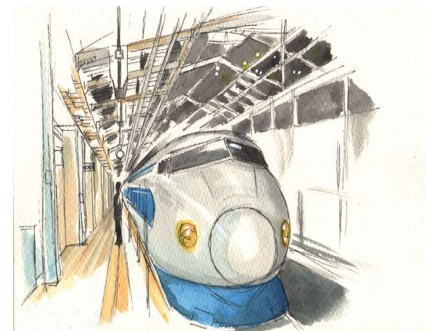
※ 前回までのあらすじ = 雄大は中学3年の時、失踪した父大志がかつて済んでいた神戸に祖父母を訪ねて妹はるかとは過ごした。そこで当時の父の姿や、先の戦争での出来事を感じ取り、大学に進んだ彼は今アメリカで国際関係を学び、今、一時帰国の途にいた。 = (尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

たびだち

完. 出発

雄大を乗せた飛行機は成田空港の滑走路に到着した。ここから彼は自宅のある札幌に向わず、東京から新幹線で祖父母のいる神戸に向った。それは既に70歳を超え最近は何っきり病弱になった祖父に会うためと、大阪で開かれる在日外国人向けの平和シンポジウムで原爆投下についてメッセージを贈る事になっているためだった。「やあ、雄ちゃん。大きくなって。もう立派な大人やなあ。」祖母の美子が笑顔で出迎えてくれた。「みんなは？お母さんも、はるかも元気か？お父さんはやっぱりまだ音沙汰ないの？」「アメリカ行ってんねんやて？どう？あちは？もう慣れた？」

美子は相変わらずのマシガントークで雄大を質問責めにした。「なんやなそんなとこで。話はあとや。まー早よ中に入れてりーな。」奥から祖父昭男の声がした。「そやな。かんにんな、こんな玄関先で。」「いいえ。大丈夫です。」雄大はそう返事するのが精一杯だった。祖父は思ったより元気そうだった。「どうですか？お加減は？」「いやもう大丈夫や。手術した時は大変やったけどな。」祖父はこの夏、心臓のバイパス手術を受けたばかりだった。「ほんまやったらもう死んでもよかった。そしたらあの時死に損なって今まで生き恥さらして来たのがようやく終わる事ができる。」「何言うてんねんな。あの時生きられたから、今こうして子供や孫に恵まれる事ができたんやろ。」美子がたまらなくたしなめた。「そうですよ。おじいさんが生きて頂いたからこそ僕がこうして生きてられるんです。」雄大が力強く合わせた。「でもその大志はどこでどうしとんだかさっぱり分からんようになってしもた。」「いいえ、父は必ず今も立派に生きて、僕らを見守ってくれているはずです。」「あ、そうそう。これアメリカのお土産です。おばあさんの分とペアのマフラーです。」



（次ページ）